

「新人類」は今  
—「大人」になりきれない「若者」たち—

片 桐 新 自

“Shin-Jinrui”(New Young Generation) Today :  
Young Generation Who Cannot Grow Up

Shinji KATAGIRI

Abstract

This paper clarifies whether people who graduated 4-7 years ago and are in their late twenties or early thirties have changed their values since their college days. As the result of a questionnaire survey, I found that they have changed their values to some degree, but it was not drastic change. Their values in college were not critical, like many young people in previous generations, so it was not necessary to change those values drastically, when they graduated from colleges, got married, and became parents. They, the so-called "Shin-Jinrui" generation, are growing older, though they do not recognize themselves to be adults. The difference between "the young" and "the adult" may be disappearing.

Keywords: "Shin-Jinrui", young generation, adult, values, social role, role in family, age, "middle-class" consciousness

抄 録

本稿は、大学を卒業してから4～7年経った20歳代後半から30歳代初めの人々を対象に、その意識や価値観が大学時代と比べてどのように変化したのかを質問紙調査によって明らかにしようとしたものである。分析の結果、時代状況や社会的役割の変化によって、彼らの意識や価値観もある程度変化していることが明らかになった。ただ、こうした変化は、大学時代と比べて根本的に変わってしまったというほどのものではない。これは、もともと彼ら「新人類」世代が、かつての若者世代と異なり、批判型価値観を持っていなかったことにその原因が求められる。豊かな中流意識社会に適合的な価値観の持ち主であった「新人類」世代は、就職をしても、結婚をしても、親となっても、「若者」から「大人」になったという自己認識を持たぬまま、年齢を重ねている。「新人類」世代以下では、「若者と大人」という区分が徐々に消失していくことになるのかもしれない。

キーワード: 「新人類」, 若者, 大人, 価値観, 社会的役割, 家庭内役割, 年齢, 中流意識

## 1. 問題意識と研究方法

### 1-1 問題意識

若者についての研究書はたくさん出されているが、若者とは、一体どのあたりの年齢層を指すのであろうか。多くの若者論が取り上げている対象は、ほぼ下は高校生から上は20歳代前半といったところであろう。この年齢層の大多数は、肉体的には大人と変わらない体型になっているが、精神的には親の庇護の下にある子どもの立場にあると言ってよいだろう。この「肉体的には大人だが、精神的には子ども」という状態こそ、まさに「若者」を規定する特性である。こうした観点から、筆者自身も典型的な若者層として大学生を対象に2度にわたって若者の意識・価値観調査を試みた<sup>1)</sup>。そうした研究を進める中で、大学生という時代に持っていた意識や価値観は、歳をとるにつれてどのように変わっていくのだろうか、ということが気になりはじめた。従来の「年代論」的考え方からすれば、仕事を持ち、結婚をし、子どもを持つようになれば、責任感も増し、自ずと意識や価値観も変わっていくはずである。しかし、1980年代の半ば以降注目されるようになった「新人類」と名付けられた若者世代は、従来の若者世代と異なり、社会に反抗的ではなく、上昇志向が弱く、圧倒的に私生活を重視するという、従来の「年代論」が想定していた若者像から言えば逸脱の特徴を持っており、必ずしも年齢を増したからと言って、意識や価値観を変化させていくとは予想できない部分もあった。はたして彼らは、過剰なまでに豊饒の時代に生まれ育った新しい価値観を持った「新人類」世代なのか、それともやはり歳とともにいわゆる「大人」になっていく人々なのか、これを明らかにすることがこの研究の目的である。

### 1-2 研究方法

この研究目的を遂行するために、筆者が1987年に実施した第1回目の若者調査の際に、大学生であった——すなわち調査の対象となった——年齢層の人々に対して、郵送によって調査を行うことにした。具体的な調査対象者は、87年の調査の時にも対象とした関西大学社会学部の卒業生から抽出した。同一人物を対象にしたわけではないので、厳密なパネル調査ではないが、一定の比較は可能と考えてもよいだろう。調査票は、95年の8月に960名に対し発送し、約1ヶ月の期間を経て、288票が有効回答として回収された。回収率は30.0%ということになるが、大学を卒業してから4～7年、年齢で言うと20歳代後半から30歳代初めというかなり忙しい日々

---

1) 片桐新自「新人類たちの価値観——現代学生の社会意識——」『桃山学院大学社会学論集』第21巻第2号、1988年、および、片桐新自「若者のコミュニケーションと価値観」『関西大学社会学部紀要』第25巻第2号、1993年。

を送っている年代の人々であることを考慮すれば、必ずしも低い回収率とは言えないだろう。性別、卒業年度、専攻、大学時代の出席状況などの分布を見る限り、極端な偏りはなく、この時期に関西大学社会学部を卒業した層をある程度代表しうるサンプルと言えるだろう。

今回の調査の結果として表れた意識が8年前の意識と比べて変化しているとしたら、その原因としては以下のようなものが考えられる。第1に、8年という年数が個々の人々に様々な経験をもたらすことによって生じる影響(年齢効果)。第2に、就職や結婚や子どもの誕生を契機とする社会的役割の変化がもたらす影響(役割効果)。第3に、時代そのものの変化の影響(時代効果)が考えられる。これらを明らかにするためには、いくつかの比較分析が必要となる。本稿で、筆者が主として比較の参考にするのは、以下の3つの調査研究である。ひとつは、筆者自身が87年に行った大学生調査である。今回の調査は上で述べたように、この87年調査の際に大学生だった人々のその後の変化を調べることに最大の狙いがあるので、この87年調査は比較のためのもっとも基本となる調査と言える。この調査は複数の大学の学生を対象に行ったものであるが、大学により意識の差がかなり見られたので、今回の調査対象者が在学していた関西大学の学生のデータ(男性:76人, 女性:28人)を参考にする。ふたつめは、その5年後の92年にやはり筆者が行った大学生調査である。調査時期が今回の調査と比較的近く、世代的には今回の調査対象者のすぐ下の世代にあたることから、「時代効果」などを明らかにする上で、参考になる。もちろん比較対象とするのは、関西大学生のデータ(男性:88人, 女性:72人)である。三つめは、1973年から5年おきにNHK放送文化研究所が行っている「日本人の意識」調査である<sup>2)</sup>。今回を含めて筆者が実施した3回の調査とも、このNHKの意識調査と同一の質問文をいくつか盛り込んでいるので、比較が可能である。関西大学社会学部の卒業生だけを対象にした今回の調査を相対化する上でも、80年代以前の意識状況との比較をする上でも、このNHKの調査は重要である。この調査は16歳以上の年齢層を幅広く含むが、今回の筆者の調査対象者の3/4が包摂される年齢層は20歳代後半なので、この年齢層をここでの具体的な比較対象層としたい。

### 1-3 調査対象者の基本属性

まず、今回の調査対象者の基本属性を見ておこう。男女の内訳は、男性164人(56.9%)に対し、女性124人(43.1%)である。このうち、既婚者は、男性の53.7%、女性の40.3%である。さらに、子どもがいる者は、男性の24.4%、女性の20.2%である。結婚しているかどうか、子どもがいるかどうかは、意識や価値観に大きな影響を与えると考えられるので、この割合は常

---

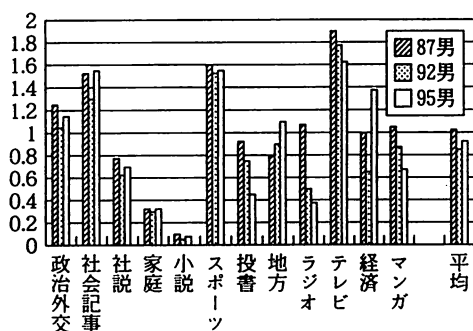
2) NHK放送文化研究所の調査については、NHK世論調査部編『現代日本人の意識構造』日本放送出版協会、1991年、橋本昌児・高橋幸市「日本人の意識の20年<sup>1)2)</sup>」『放送研究と調査』1994年5月号、6月号などを参照。なお、高橋幸市氏より、93年の第5回調査に関するより詳しいデータをお送りいただいたことを感謝したい。

に念頭に置いておきたい。居住形態から見てみると、未婚者の7割は親と同居しており、相変わらず家庭では子どもの立場にある。他方、既婚者では9割以上が親と別居して、夫婦のみ、あるいは夫婦と子どもという核家族を形成している。仕事は、6割以上が会社勤めであるが、既婚女性の6割、子を持つ女性の96%が専業主婦と回答しており、機会均等法施行後に就職したこの世代においても、女性の仕事と家庭の両立が容易ではないことをよく示していると言えよう。

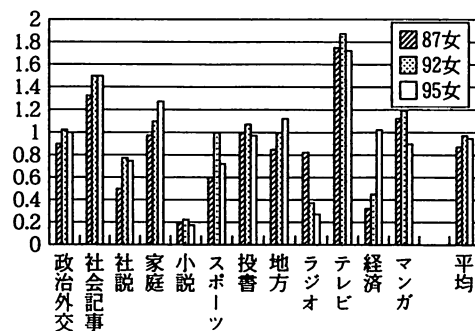
## 2. 社会的関心と政治意識

### 2-1 社会的関心

80年代の後半に「新人類」と呼ばれていた若者たちは、自分と自分の近い人たちの「小状況」にしか関心がなく、いわゆる社会状況や政治状況といった「大状況」には関心がないとしばしば指摘された。筆者の87年調査においても、やはり当時の学生たちに高い社会的関心や政治的関心があるとは解釈できなかった。しかし、社会的責任を負わされていない学生と異なり、社会人ともなれば否が応でも社会的・政治的関心を持たざるをえないのではないかという予想が可能である。そこで、この点を明らかにするために、87年調査でも取り上げた新聞記事の読



第1図 男性の新聞記事の読み方



第2図 女性の新聞記事の読み方

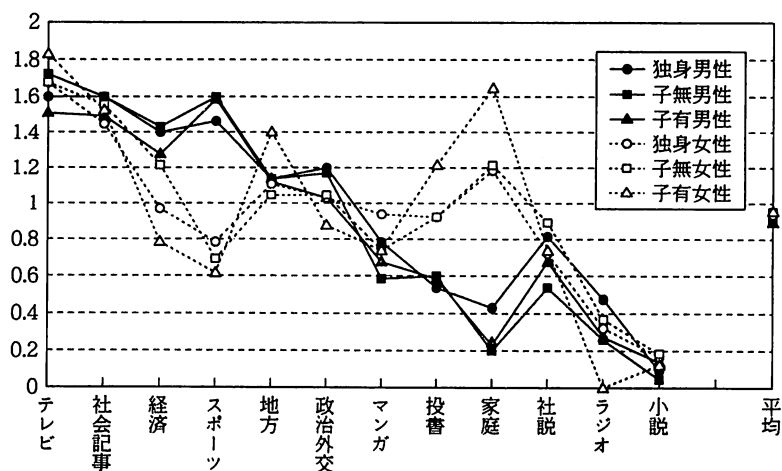
(「必ず読む」を2点、「時々読む」を1点、「ほとんど読まない」を0点として計算した各項目の平均得点)

み方が変化したかどうかを見てみよう。

まず、全項目の平均点を見た場合、男女合せて0.99から0.94へとわずかに低下しており、新聞をよく読むようになったとは言えないが、個々の項目に関してみると、さすがに学生時代とは異なる点が見受けられる。関心が高くなった方でもっとも顕著な項目は、経済面である。男性は0.99から1.37に、女性も0.33から1.01に大きく上昇している。景気動向に左右されて働いている人たちが経済に関心が高いのは当然だが、家庭に入った専業主婦の得点も0.90あり、家計を担う者として経済に対するそれなりの関心を持っていることがわかる。次に関心が高くな

った項目は、地方版である。男性は0.81から1.11に、女性は0.85から1.13にと、ともにかなり高くなっている。もっとも地方版に関心が高いのは、子どもを持つ女性たち(1.39)である。彼女たちは、また家庭婦人欄に対する関心も大幅に高めており(1.65)、まさに家庭と地域に拠点を置いて生活していることをよく表していると言えよう。家庭婦人欄は、女性層においては全般的に関心が高くなっているのに対し、男性では非常に関心の低い項目として留まっている<sup>3)</sup>。

次に、関心が低下した項目を見てみよう。男女共通のものとしてあげられるのは、ラジオ欄とマンガである。ラジオは92年の学生調査でもすでに大幅な関心の低下が見られる。それゆえ、この変化は、学生から社会人に立場が変わったことによるものというよりも、衛星放送の普及により、87年にはテレビ欄とともに目につきやすい新聞紙面の最終面に掲載されていたラジオ欄が、目につきにくい中の方のページに移動したことによるものと考えた方がよいであろう。他方、マンガは明らかに立場の変化による関心の低下として説明されるべき項目であろう。男性で1.05から0.68へ、女性では1.11から0.88へと低下している。通勤電車の中でマンガを読むサラリーマンの姿がしばしば話題になるが、現実にはやはり徐々にマンガ離れは進むようだ。おそらく、これは社会人になった途端にマンガをおもしろく感じなくなるということではなく、もともとマンガは暇な時に読むものであり、その暇が学生時代と比べて極端に少なくなったために、自然とマンガ離れをしていったということだろう。



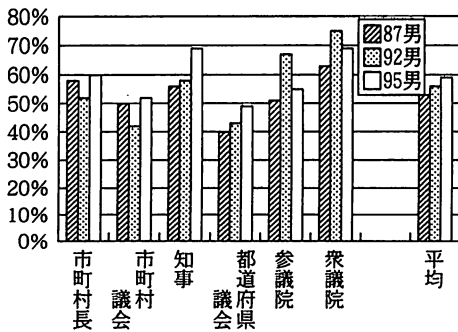
第3図 家庭内役割別新聞記事の読み方

女性では他には関心が大きく低下した項目はないが、男性では投書欄とテレビ欄の得点もかなり低下した。基本的には、いずれも時間的余裕がないことが関心低下の原因と考えられる。特に、子どものいる男性では、テレビの得点が1.51に過ぎず、スポーツ欄(1.59)よりも読ま

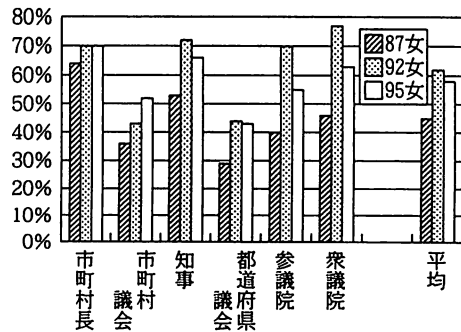
3) 女性では12項目中3番目に関心の高い事項であるのに対し、男性では12項目中11番目の関心事項となっている。

れていない。仕事が忙しい上に、まだ子どもが幼くいろいろな形で育児に協力をしなければならない若い父親たちは、のんびりとテレビを見ている時間などあまりないという生活をしていると考えられる。他方、そのパートナーにあたる若い母親たちは、投書欄もテレビ欄ももっともよく読んでいる層である。幼児の存在によって行動を規制される母親たちは、家庭の中でテレビや新聞から自分の関心のある情報を集めることに積極的にならざるをえないのだろう。ただし、第3図を見てもらうとわかるが、この若い母親たちの新聞記事の読み方はすべての項目に対して高いわけではない。12項目中、テレビ欄(1.83)、家庭婦人欄(1.65)、地方版(1.39)、投書欄(1.22)の4項目で最高点を示す一方、ラジオ欄(0)、スポーツ欄(0.61)、経済面(0.78)、政治外交面(0.87)では最低点を示す。新聞を読む時間はあるが、関心のない紙面にはあまり目がいかないのである。

典型的な「大状況」である政治外交面に対する関心は、新聞記事の読み方から見る限り大きな変化は見られないが、政治関心については他の質問もしているの、そちらの方から見ていこう。まず顕著な変化として指摘しうるのは、支持政党はないと答える人が大幅に増加したことである。87年調査でも単純に支持政党を尋ねた場合の「支持なし層」は6割を超えていたが、しいて支持できそうな政党をあげてもらえば、それなりに政党名があがり、「支持なし層」は3割程度にとどまっていた。ところが、今回の調査では、単純に支持を尋ねれば75%以上が、しいてと尋ねても4割以上が支持する政党はないと答えた。87年調査を分析した際に、未成年も含む大学生なので、支持政党がない人がある程度多いのは当然で、年齢が増してきたら、「支持なし層」は減少するだろうと予測していたが、全く異なる結果が生じた。その原因は、ここ数年の政党政治の大混乱にあることは明らかである。92年の学生調査でも、すでに「支持なし層」は大きく増えていたし、筆者の調査ばかりでなく、各種世論調査でも「支持なし層」の増加が伝えられている<sup>4)</sup>。



第4図 男性の投票意欲



第5図 女性の投票意欲

4) たとえば、朝日新聞が1995年7月に実施した全国調査では、「好きな政党はない」という36.7%と「答えない」という20.0%を合わせて56.7%の人々が「無党派層」(「支持なし層」)として位置づけられている。『朝日新聞』1995年7月19日朝刊、2頁参照。

こうした「支持なし層」の増加は政治的関心の低下を意味するのだろうか。今回の筆者の調査対象になった人々は、各種の選挙への投票意欲が6割近くあり、全くの政治的無関心層とは言えない<sup>5)</sup>。ただし、6割という数字は、87年学生調査と比べると高くなっているが、92年学生調査とはあまり変わらない数字である。それゆえ、加齢に伴い真剣な政治意欲が増したと考えより、大学生も含め現在有権者の間で広まりつつある、最近の政治状況を何が起こるかかわからないテレビの中の出来事として、ワイドショー的関心を持っているためと解釈した方が良さそうである。自分が主権者であることを自覚して自分の意見を代表してくれる政党を支え政治を動かしていくという考えではなく、傍観者あるいは観客として政治ドラマを楽しんでいるといった感じなのではないだろうか。一定程度の投票意欲があるのも、馬券を買わずにレースを見るよりは1枚でも馬券を買っておいた方がレースを楽しく見られるという気持ちに近いのではないだろうか。

家庭内役割別では、子を持つ女性たちの投票意欲がかなり高い点が注目される。特に他の層と比べて有意に高いのは、市町村長選挙(平均63.9%に対し82.6%)や市町村議会選挙(平均52.1%に対し70.0%)であり、ここでも身近な地域に対するこの層の関心の高さが見てとれる<sup>6)</sup>。

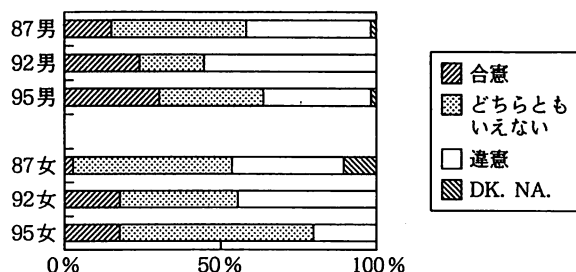
## 2-2 政治的意見

以上見てきたように、社会的・政治的関心は単純に高くなったわけではないが、ある種の変化はしていた。では、政治的意見は変化したのだろうか。従来、政治的立場を総合的に表す指標として使われてきた「政党支持」は、近年の政党の分裂・合併騒動によりほとんど無意味なものとなりつつある。共産党以外は、その主張がほとんど変わらなくなってしまった現在の政治状況においては、たとえある政党を支持していると回答したとしても、それは政党の政策に対する支持というよりは、単なる政党イメージに対する好感度を表す程度のものに過ぎないと言えよう。そうした限界を念頭に置きつつ、多少今回の調査における支持政党分布に触れておけば、自民党の支持率は大幅に下がっている(87調査:31.8%→92調査:33.7%→今回調査:15.9%)が、実質的に第2自民党的意味合いを持つ新進党の支持率(15.7%)を合わせれば、あまり変わっていないとも言える。他方、結党以来保持してきた政治的立場をほとんど捨ててしまった社会党(現社民党)は、共産党よりも支持率が低くなり(社会党:6.6%, 共産党:8.3%)、このままではミニ政党のひとつになる日も近いことを予感させる。さきかげもその規模の小ささが不安を感じさせるのか、大きな支持を獲得するには至っていない(6.6%)。しかし、

5) この投票意欲を、「支持なし層」だけについて見ると、単純に支持を尋ねた時に「支持する政党はない」と答えた人では53.0%、しいてと尋ねても「ない」と答える人々の場合は43.4%である。

6) ちなみに、衆議院選挙に関しては、この層の投票意欲は他の層と比べてもっとも低い(平均66.3%に対し56.5%)。

いずれにしろ上に述べたように、今や政党支持から政治的立場や意見を推測することは困難なので、個別の問題に関する政治的意見を見ていこう。



第6図 自衛隊は違憲か？

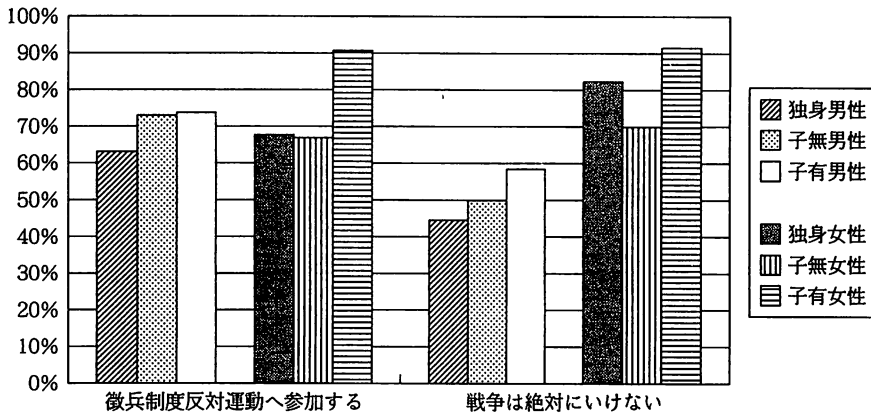
まず、自衛隊に関しては否定する人が減った。第6図に見られるように、自衛隊を違憲だと考える人が減り、合憲だと考える人が増えた。また、今後の自衛隊をどうするかについても、「なくすべきだ」という意見は減り（87調査：23.1%→92調査：25.0%→今回調査：10.4%）、現状維持を望む人が増えている（87調査：41.4%→92調査：36.9%→今回調査：52.8%）。このような変化が生じたのには、年齢を増したことも多少影響しているかもしれないが、それ以上に調査を行った95年に、阪神淡路大震災やオウム事件が起こり、そうした緊急事態の收拾のために自衛隊が活躍していることを目のあたりにし、災害救助のために自衛隊が必要だと認識する人が増えたためではないかと考えられる。また、この8年の間に、ソビエトをはじめとした多くの社会主義国家が崩壊し、東西対立が弱まったため、核戦争の危険や日本が戦争に巻き込まれる危険が遠ざかったと調査対象者たちが意識している<sup>7)</sup>ことも、自衛隊に対する寛容な見方を増した重要な原因と考えられる。

次に、天皇制に関しては、もちろん現状維持が圧倒的多数派だが、87調査と比べると「なくすべきだ」という意見が多少増えている（男：30.1%→37.8%，女：21.7%→24.2%）。大きな差ではないので標本誤差の可能性が高いが、もともと天皇に対して特別な愛着のない世代なので、95年に頻繁に報道されていたイギリス王室のスカンダルなどから、日本の天皇制に対しても多少懐疑的な目で見える人が増えたのかもしれない。

運動への参加意欲に関しては、反核運動に参加したいと思ったことのある人は増加している（男：18.7%→25.2%，女：8.0%→21.8%）のに対し、徴兵制度が実施されそうになった場合にその反対運動に参加するつもりだと答える人はやや減っている（男：73.6%→68.5%，女：82.6%→71.5%）。反核運動に関する質問は、現時点だけでなく過去に参加意欲を持っていた人

7) 「近い将来に核兵器を使った戦争が起こる」と思う者の割合は、87年調査では48.1%いたが、今回の調査では26.7%しかなくなった。また、「近い将来に日本が戦争に巻き込まれる危険がある」と考える人も、87年の64.4%から46.2%に減少した。





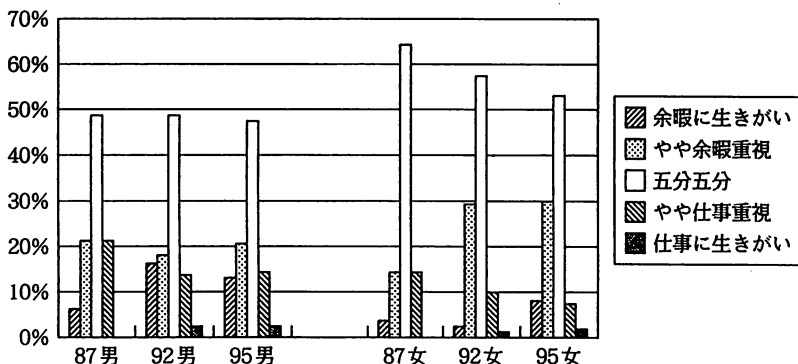
第7図 反戦意識の高い母親たち

も含む形になっているため増加したのは当然と言えるが、女性で参加したいと思ったことのある人が、8.0%から21.8%へ大きく伸びたのには、今回の調査を実施していた時期に、世界中の非難を浴びながらフランスの核実験が行われていたことなども影響していると言えよう。他方、徴兵制度の反対運動への参加意欲が減ったことに関しては、92年学生調査において今回の調査以上に参加すると答えた人が少なかった（男：61.4%，女：64.8%）ことを考慮するならば、東西冷戦の崩壊とともに、戦争に巻き込まれる可能性が一段と減少し、徴兵制度が導入されたらという仮定があまりに現実離れたものとして受け止められるような時代状況に、その原因が求められるかもしれない。また、加齢して一般的な徴兵年齢から外れたために、もはや自分たちには直接関係がない問題だと認識する人が出てきたということも考えられる。しかしそうした中で、すでに子を持つ親の立場になった若い母親たちの意識はかなり異なる。全体では7割弱しかない徴兵制度反対運動への参加意欲が、この若い母親層だけは9割を超える。戦争は絶対に行けないという意見も全体では6割強の支持者しかいないが、この層ではやはり9割を超える。こうした比率が出てくるのは、この層の女性たちがもはや自分たちの世代にとってどうなのかという以上に、自分の子どもたち世代にとってどうなのかという発想を強く持つようになっているせいだと考えられる。ちなみに若い父親たちの方はどうかと言えば、確かに独身の男性や子どものまだいない既婚男性に比べれば、徴兵制度反対運動への参加意欲も高いし、戦争は絶対に行けないという意見も多いが、母親たちほど高い比率としては表れてこない。

政治的意見の変化について見てきたが、基本的には1960年代までの学生たちとは異なり、学生時代から現状が大きく変わらないことを望む志向性の強かったこの世代の人々は、社会に出たからといって、急に政治的意見を変えなければならないようなことは少ない。それゆえ、87年調査と比べて大きな変化は見られないし、多少変わっている点があっても、その多くは現実社会の政治状況の変化の影響と考えられる。

### 3. 仕事と生活

#### 3-1 仕事観

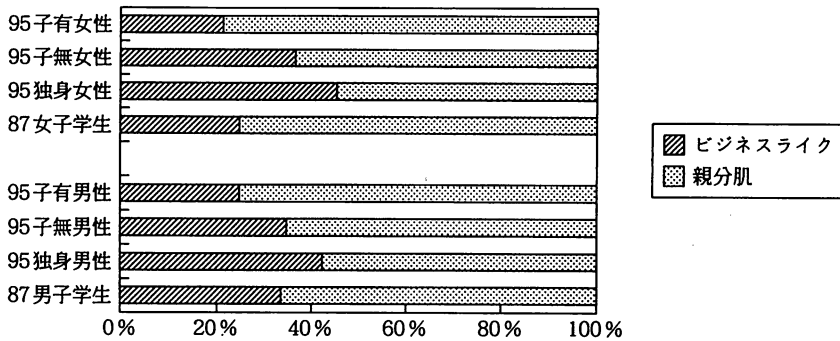


第8図 仕事か余暇か

大学を卒業して4～7年経った人々をもっとも考え方を变化させている可能性が高いと予想されるもののひとつが、仕事観である。アルバイト経験から推測していたにすぎない学生時代の仕事観は、実際に働いてみてどう変わったのだろうか。まず、仕事と余暇のどちらを重視するかという質問の回答を見てみよう。以前書いた論文の中でも指摘した<sup>8)</sup>ことだが、この世代は意外なほど「バランス」を重視する人が多い。それゆえ、仕事か余暇かと聞かれたら、「五分五分で」という考え方を選ぶ人が約半数いる。残りの半数が、仕事派と余暇派に分かれる。87年の学生調査では、この残りの半数の回答はほんの少しだけ余暇に寄っている程度だったが、今回の調査では余暇派が仕事派をかなり引き離れた。ただし、今回の回答傾向は、92年の学生調査の結果とかなり類似しているのも、仕事を経験したために余暇派になったというよりは、豊かになったこの日本の中では頑張る仕事をするにますます大義名分がなくなつたためと考えた方がよいであろう。家庭内役割別にこの質問に対する回答傾向を見てみると、男性では子どものいる人がもっとも仕事志向が強い(余暇志向：30.8%，仕事志向：30.8%)のに、女性ではそのパートナーにあたる子どものいる人がもっとも余暇志向が強い(余暇志向：47.8%，仕事志向：4.4%)というずれが生じている。結婚をし子どもも得、家庭的に安定した男性は仕事志向を強めていくのに対し、子育てのために仕事を辞め家庭に入った女性たちは、力を注ぐべき仕事がないという意識から、余暇へと志向性が流れていくのだろう。

8) 片桐新自, 1993年, 114～115頁参照。

「新人類」は今（片桐）



第9図 好む上司のタイプ

上司のタイプとしては、多少無理なことも言うがめんどうみのよいタイプ（「親分肌上司」）が、無理なことも言わないがめんどうみのよくないタイプ（「ビジネスライク上司」）より相変わらず好まれているが、その差はやや縮まった。特に男女とも、まだ独身の人々の間で、ビジネスライクな上司を望む人がかなり増えている。この好む上司のタイプと様々な項目との間に有意な相関関係が見られる（第1表参照）。

まず、男性に関してみると、上で見た「仕事中心か余暇中心か」については、「ビジネスライク上司」を好む人の過半数が余暇を中心にしたと答えているのに対し、「親分肌上司」を好む人では「五分五分」が過半数を超えるが、残りの人たちでは「余暇派」よりむしろ「仕事派」が多い。また、「ビジネスライク上司」を好む人たちは、「親分肌上司」を好む人たちに比べ、若い時に苦勞することを望まず、その日その日を自由に楽しく過ごすことを生活目標にしており、さらには収入さえある程度得られるなら遊んで暮らす、あるいは出世するより気楽な地位にいたいことを望んでいる。次に、女性に関しては、男性ほどではないが、やはり「ビジネスライク上司」を好む人たちは、「親分肌上司」を好む人たちに比べ、若い時の苦勞を望まず、その日その日を自由に楽しく過ごすことを目標にし、気楽な地位にいたいと考えている人が多い。その他にも、親友に忠告をするかという質問項目や、みんなに合わせた行動をするかといった質問項目でも差が見られることも考慮に入れると、「ビジネスライク」タイプの上司を好む人たちは、相対的に密接な人間関係を好まない人が多いと考えられる。家庭をつくることも、親友へ忠告することも、「親分肌」の上司とつきあうことも、自分が出世して責任ある地位についてしまうことも、みんな人間関係が密接なものにならざるを得ないため、そのいずれをも敬遠しているということなのだろう。まさに「マサツ回避の世代」<sup>9)</sup>と見えよう。

仕事観を全体としてみて言えることは、学生時代と比べてある方向に全員が変わったわけではなく、それぞれの社会的立場によって変化の方向が異なると言えよう。特に、それが明確な

9) 千石保『マサツ回避の世代』PHP, 1994年を参照。

第1表 好む上司のタイプ別意識

(単位：%)

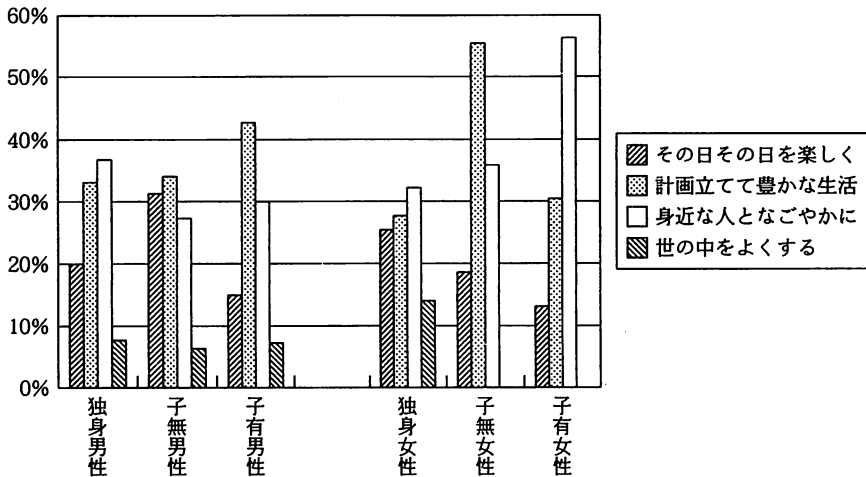
|                         | (男 性)   |      | (女 性)   |      |
|-------------------------|---------|------|---------|------|
|                         | ビジネスライク | 親分肌  | ビジネスライク | 親分肌  |
| (仕事か余暇か)                | ***     |      |         |      |
| 1. 余暇を重視                | 28.8    | 4.0  | 8.3     | 8.0  |
| 2. やや余暇を重視              | 28.8    | 17.0 | 39.6    | 24.0 |
| 3. 五分五分で                | 35.6    | 55.0 | 45.8    | 58.7 |
| 4. やや仕事を重視              | 5.8     | 21.0 | 4.2     | 8.0  |
| 5. 仕事を重視                | 1.7     | 3.0  | 2.1     | 1.3  |
| (生活目標)                  | ***     |      | **      |      |
| 1. その日その日を自由に楽しく過ごす     | 40.4    | 12.9 | 35.4    | 13.3 |
| 2. しっかりと計画をたてて、豊かな生活を築く | 19.3    | 46.5 | 35.4    | 33.3 |
| 3. 身近な人たちと、なごやかな毎日を送る   | 35.1    | 31.7 | 22.9    | 44.0 |
| 4. みんなと力を合わせて、世の中をよくする  | 5.3     | 8.9  | 6.3     | 9.3  |
| (若い頃の苦勞はした方がいいか)        | ***     |      | *       |      |
| 1. そう思う                 | 44.8    | 69.6 | 52.1    | 68.0 |
| 2. そうは思わない              | 55.2    | 30.4 | 47.9    | 32.0 |
| (遊んで暮らしたいか)             | ***     |      |         |      |
| 1. そう思う                 | 67.8    | 43.1 | 40.4    | 34.7 |
| 2. そうは思わない              | 32.2    | 56.9 | 59.6    | 65.3 |
| (出世するより気楽な地位にいたいか)      | ***     |      | ***     |      |
| 1. そう思う                 | 79.0    | 53.5 | 85.1    | 60.0 |
| 2. そうは思わない              | 21.0    | 46.5 | 14.9    | 40.0 |
| (親友への忠告)                | *       |      |         |      |
| 1. 忠告する                 | 63.8    | 78.0 | 54.2    | 60.0 |
| 2. 忠告しない                | 36.2    | 22.0 | 45.8    | 40.0 |
| (みんなに合わせるか)             |         |      | *       |      |
| 1. 合わせる                 | 70.7    | 79.2 | 70.8    | 84.0 |
| 2. 自分のしたいことをする          | 29.3    | 20.8 | 29.2    | 16.0 |

(カイ二乗検定 \*\*\*…P<0.01 \*\*…P<0.05 \*…P<0.10)

形で表れているのは、男性の方である。一方には学生時代よりも一貫して仕事に対して積極的な意識を持つようになった既婚有子男性があり、他方には仕事をしていなかった学生時代よりも仕事に対して消極的な意識を持つようになった独身男性がいる。そして既婚無子男性はちょうどその中間に位置すると言えよう。女性の方は男性ほど単純な形で回答が表れない。おそらく、これは男性と異なり、仕事をやめて家庭に入るという選択肢があるためだろう。男性の場合は、まず就職し、次に結婚し、そして子どもが生まれるというコースがほとんどの人にとって一本道のようにになっているのに対し、女性の場合は、男性と違い、結婚をすることや子どもを持つことが仕事を持っていることを前提としていないどころか、むしろ両立しにくいものとなっている。それゆえ、女性では「独身」「既婚無子」「既婚有子」が、男性にとってのように一本道のように並ばず、仕事観も男性のように単純に並ばないのだろう。

### 3-2 生活目標

生活目標に関しては、87年調査と比べると、男性ではあまり大きな変化はないが、女性では、「その日その日を自由楽しく過ごす」という考えが減り（35.7%→21.8%）、「身近な人たちとなごやかな毎を送る」という考えが増えている（17.9%→35.5%）。同じ質問項目を使っているNHK放送文化研究所の「日本人の意識」と比較してみると、87年調査の際に「身近な人たちとなごやかな毎を送る」という選択肢を選んだ女子学生がやや少なすぎる傾向はあった<sup>10)</sup>が、責任の重くない気楽な学生の立場から、社会人・家庭人にならなければならないから、基本的にはこの変化の方向は当然のものと受け止められよう。特に、子を持つ女性たちの過半数（56.5%）が「身近な人たちとなごやかな毎を送る」という生活目標を選んでいることは注目される。また、彼女たちは、自由回答で尋ねた「一番大切なもの」としても、子どもや夫との家族関係をあげる人が圧倒的に多かった。彼女たちが価値を何に置いているかは明白である。他方、結婚はしているがまだ子どものいない女性たちの過半数（55.6%）が生活目標としているのは、「しっかり計画を立てて、豊かな生活を築く」ことである。彼女たちの中には、日本がもっと経済的に発展すべきだと考える人も多く<sup>11)</sup>、経済的な上昇志向の強い層と言えよう。独身の女性たちの生活目標では極端に多く選ばれた選択肢はない。それゆえ結果的に、「その日その日を自由に楽しく過ごす」（既婚者16.0%に対して26.4%）と「みんなと力を合わせて世の中をよくする」（既婚者0%に対して13.9%）という目標が、既婚者に比べやや多くなっている。多様な意識の持ち主が含まれる層と言えよう。



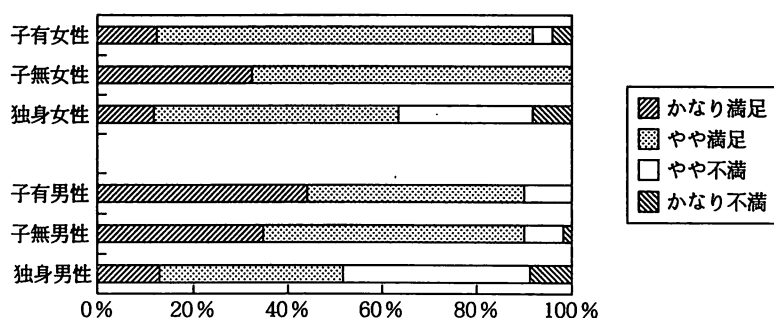
第10図 家庭内役割別生活目標

10) 88年に行われたNHK放送文化研究所の調査では、20～24歳の女性で「身近な人たちとなごやかな毎を送る」という生活目標を選んだ人は、44%もいた。

11) 「もっと日本が経済的に発展した方がいい」と思う人の割合は、独身女性で27.8%、子どものいない既婚女性で48.2%、子どものいる既婚女性で13.6%である。

男性の方は家庭内役割別で女性ほど大きな差は出ていないが、しいてその特徴をあげれば、子どものいる男性では、「しっかり計画をたてて、豊かな生活を築く」という目標をもつものがやや多い(42.5%)。結婚はしているが子どものいない男性も「しっかり計画をたてて、豊かな生活を築く」がもっとも多く選ばれているが、「その日その日を自由に楽しく過ごす」との差はわずかしかない(33.3%と31.3%)。独身男性では、意外にも「身近な人たちとなごやかな毎日を送る」という生活目標がもっとも多く選ばれている(36.8%)。まだ現実のものとなっていない家庭生活を目標に描いているのかもしれない。

### 3-3 生活満足感と生まれ変わり希望



第11図 家庭内役割別生活満足感

以上見てきたように、仕事や生活にたいする考え方は、当然のことながら結婚しているかどうか、子どもがいるかどうかによって大きく影響される。その集約的な表れが、生活満足感の違いである。全体としては、学生時代より大きく減った生活不満感だが(41.7%→25.7%)、独身者だけは、男女ともかなり不満感が高い。結婚している人たちでは、最大でも10%程度しかない「どちらかといえば不満」と「かなり不満」を合わせた割合が、独身男性では47.4%、独身女性では36.1%もある。「結婚適齢期」などもはや意味を失ったと言われるが、20歳代後半から30歳前後になった個々の人々の気持ちの中では、かなり大きな影響を与えていると考えないと、この独身者の生活不満度の高さは説明がつかないように思われる。数年前から「結婚できない男たち」と「結婚しないかもしれない症候群に陥った女たち」がしばしば話題に上るようになったが、男女ともあくまでも結婚したくないと考えている人は極少数である。大多数の人々は、良い人がいたら結婚をしたいという考え方を持っている<sup>12)</sup>。こうした主観的希望に加え、「結婚してはじめて一人前」といった言説や、「30歳の台に乗る」といった社会的な年齢イメージが相変わらず影響力をもっているために、20歳代後半から30歳前後になった独身の人々に、

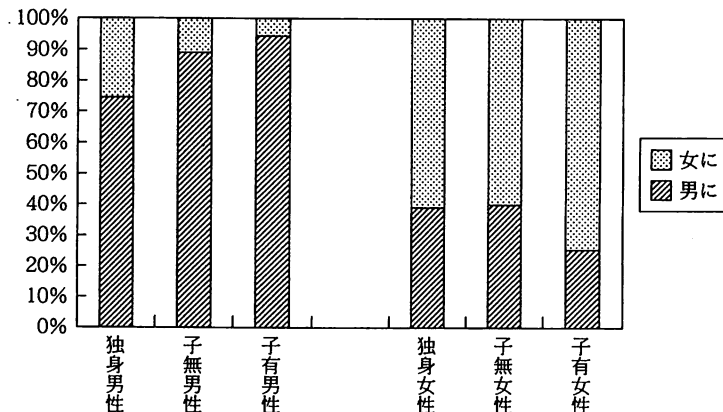
12) たとえば、厚生省人工問題研究所の1992年の調査は、18歳から35歳の独身者で、「一生結婚するつもりはない」と答える人が、男女とも5%程度しかいないことを指摘している。厚生省人口問題研究所『第10回出生動向基本調査II—独身青年層の結婚観と子供観』、1992年を参照。

まだ結婚していない自分の現在の生活を不満足なものとして強く意識させるのであろう。

結婚している人の生活満足度は、男女でかなり異なる。男性では、上でも述べたように、独身者より既婚者が、既婚者の中では子どものいる人の方が生活満足度が高いというように、一般的なライフステージが進むほど満足度が高くなるという傾向が見られるが、女性では、独身者より既婚者の方が満足度が高いのは男性と同じだが、既婚者の中では子どものいない人の方がいる人よりも満足度が高いという結果が出ている。これは、この年齢層の人々の子どもがまだ幼く手がかかることによるものだろう。日本の企業システムのあり方や、母親役割に対する社会的要請から、幼児の存在によって行動を規制され、ストレスを溜めていくのはもっぱら女性の方である。最近の若い父親たちは、昔の父親たちに比べ育児にもかなり協力的になってはいるが、多くの場合、彼らにとって子どもたちは一日の終わりや休日に仕事の気分転換をさせてくれる好ましい対象である。こうした子どもとの関わり方の違いが生活満足度の非常に高い若い父親たちと、そこまで単純に満足とは思えない若い母親たちという違いになって表れているのであろう。

子どものいない既婚女性たちの満足度はかなり高い。「かなり満足している」と答えた人が3人に1人で、残りの人はすべて「どちらかといえば満足している」と答えている。つまり、「どちらかといえば」も含めて「不満」と答えた人が1人もいなかったわけだ。「結婚して一人前」というハードルはクリアし、手のかかる子どもはいない。だからといってずっと子どもを持たないということではなく、いずれは子どもを持つことになろうが、子どもを生む年齢の上限にはまだ間があり、そのことに関する社会的なプレッシャーは結婚に比べればまだそれほど強いものではない。多くの方は仕事を持っており、社会的に活動しているという意識も持てる。このように見てくると、この年齢層では、子どものいない既婚女性たちの現在の生活に対する満足度が高いのは当然と言えよう。

しかし、ここで興味深いのは、この生活満足度の高い子どものいない既婚女性たちが生まれ



第12図 生まれ変わり希望

変われるとしたら、別の性——すなわち男性——を希望する割合がもっとも高く(40.7%)、彼女たちより満足感の低かった子どものいる女性たちが再度女性に生まれることを希望する割合がもっとも高いことである。換言すれば、これは女性であることに対する満足感、既婚有子の女性たちがもっとも高く、既婚無子の女性たちがもっとも低いということである。男性では、こうした逆転現象は起きておらず、生活満足感の高い順に、男性として再度生まれてくることに対する希望が高い。これは、既婚有子男性の高い生活満足感が、一般的に男性が進んでいくであろうと考えられるコースを着実に歩んでいることによってもたらされているものであるのに対し、既婚無子女性の高い生活満足感、一般的に言われる次のライフステージに進む——母親になる——前の限られた時期にあることからもたらされているためだろう。次のライフステージに進んだら、現在享受しているような生活はできなくなる。だからといって、子の親になること自体を拒否したくない。そもそも今の年齢だから子どもがいなくてもそれほど社会的プレッシャーはかからないが、3年後、5年後にもまわりの環境が今と同じとは考えがたい。さらに、それらすべてを振り切って、子を生まないという選択をしたとしても、男性のように重要な仕事を任せられ、地位も給料も上がっていくという保証はどこにもない、というより、その可能性は低いとしか考えられない。こういう状況に置かれている既婚無子の女性たちが、今現在の生活はいいけれど、長い目で見た時に女性であることに不満感を持つとしても、これも当然のことと言えるだろう。

独身男性の25%が女性に生まれ変わりたいと考えているというのも、興味深い。この男性の女性への生まれ変わり希望は、87年の学生調査の際に、従来の調査の結果を大きく超える約20%という数値が出て、非常に驚かされるとともに、女性の地位の向上を語るものとして注目した<sup>13)</sup>ものだが、8年たって男性全体としては減少したが、この独身男性層のようにかつての男性たちと比べると、非常に大きな割合を示す層が存在し続けていることはおおいに注目される。学生時代の女性への生まれ変わり希望は、まだ経験していない社会へ出てからの男性の責任の重さ——「男らしさ」の呪縛——を漠然と推測してのものだったのに対し、今回の独身者層の女性への生まれ変わり希望は、既婚男性などに比べ、一般的に期待される男性のライフステージを着実に歩いていけていないことから抱かれるようになったと考えられるので、学生時代より深刻な意識と言えるかもしれない。次に、生まれ変わり希望とも関連の深いジェンダー観について見てみよう。

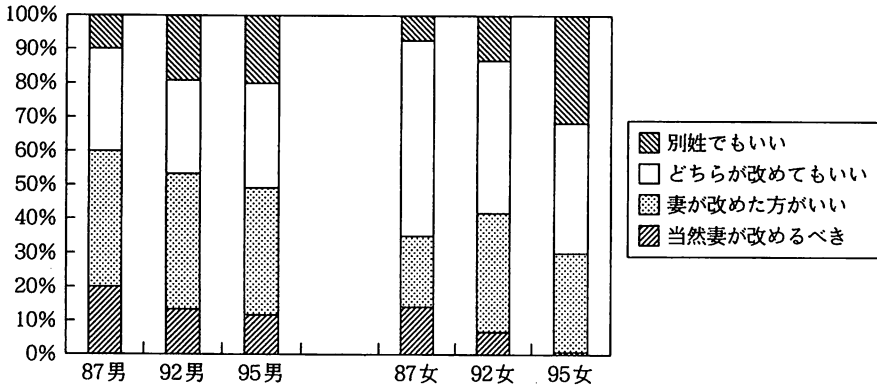
## 4 ジェンダー意識

### 4-1 夫婦のあり方

87年調査と比べると、ジェンダーに関する意識が確実に男女平等化志向に向かっていること

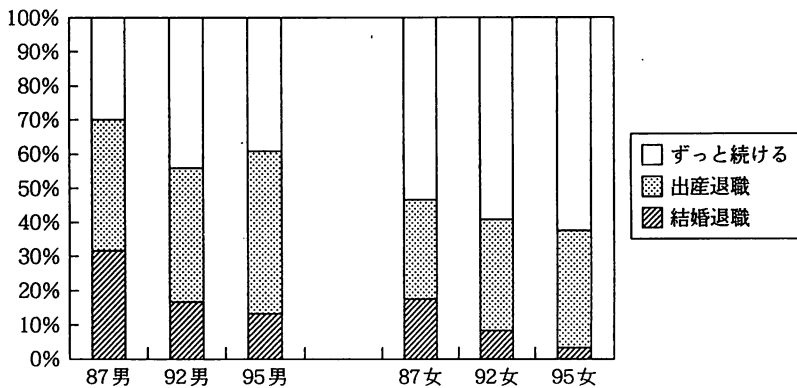
13) 片桐新自, 1988年, 123~124頁参照。





第13図 夫婦の名字

がわかる。まず、夫婦の名字をどうすべきかについては、「当然妻が改めるべきだ」という男子による家の継承を当然視した考え方を支持する人は、男性でも19.7%から12.2%に、女性では14.3%からわずか1.6%に減少している。代わって、現時点では法的な夫婦として認められないにもかかわらず「別姓夫婦がよい」という意見が、男性で10.5%から20.1%へ、女性では7.1%から30.7%へ大幅に増えている。こうした意識変化の方向性は、NHK 放送文化研究所の調査などを参考にすると、すべての年齢層で生じていることであり、加齢による変化というよりも社会的状況の変化によってもたらされたものと考えてよいだろう。特に、ここ1～2年前からは、別姓による婚姻を法的に認める民法の改正案がたびたびマス・メディアで紹介されていることもあって、「別姓夫婦」という考え方が一般化したと言えよう。92年に筆者が行った学生調査と比べても、女性ではさらに一段と「別姓」志向が進んでいる (13.9%→30.7%)。



第14図 女性の仕事

また、結婚後の女性の仕事についても、「結婚したら家庭に専念すべきだ」という意見が大きく減り (男性：30.3%→13.4%，女性：17.9%→3.2%)，「ずっと続けた方がいい」という意見が増えている (男性：29.0%→37.8%，女性：53.6%→62.1%)。これも、上記のNHKの調査

で、すべての年齢層で生じている変化として確認されるものであり、社会的状況の変化を反映したものと言えよう。

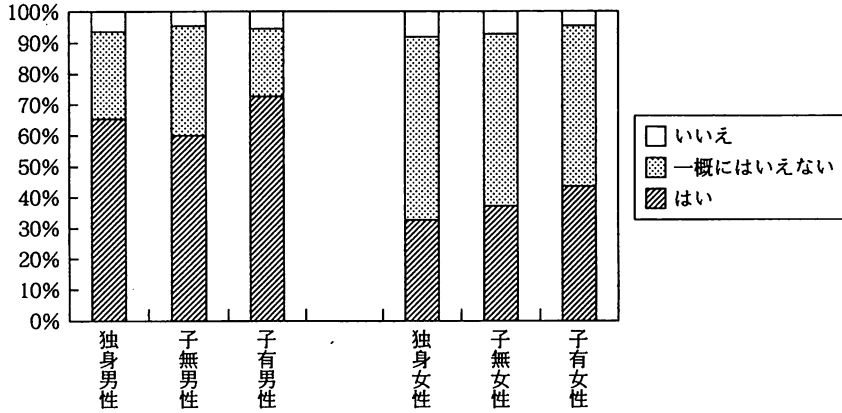
このように男女平等化志向への意識変化は男女ともに生じていることだが、その比率を見ればわかるように、まだ男女の間で意識にかなりの差がある。上の2つの項目以外にも、家事・育児を公平に分担すべきだという考え方は、女性の37.1%に支持されているのに対し、男性では14.6%にしか支持されていない。より強く平等化を求める女性たちとやや抵抗感を示す男性たちという構図はまだ生きている。特に、子どものいる男性たちの中には、全体的な傾向と異なる考え方を持つ人が少なくない。夫婦の名字は当然妻が改めるべきだという意見を支持する者は全体では7.6%しかいないが、この層では3割もいる。また、女性もずっと仕事をもち続けた方がよいという意見は全体では48.3%の支持者がいるが、この層では27.5%にすぎない。逆に、結婚したら女性は家庭に専念すべきだという意見の持ち主が2割もいる（全体では9%）。独身男性と子どものいない既婚男性は、この問題に関しては似たような意識を示し、既婚有子男性ほどには古い考え方をとらないが、女性たちと比べればやはりまだ遅れていると言わざるをえない。独身男性と既婚無子男性との多少の違いが出ているのは、家事・育児の分担に関してである。公平に分担すべきだという意見の支持者が、独身男性では11.8%にすぎないのに対し、既婚無子男性では22.9%存在する。これは、おそらく既婚無子男性の中に現実に「公平分担」に近い生活を送っている人がいるせいではないかと推測される。実際、子どもが生まれるまでは、家庭の仕事を男女で平等に分けることは十分可能だろう。

男性よりもはるかに平等化志向の進んでいる女性たちも、より詳細に見ると、家庭内役割別に多少意識が異なる。もっとも意見が分かれるのは、結婚後の女性の仕事に関してだ。結婚してまだ子どものいない女性たちは、ずっと仕事を続けるべきだという意見が圧倒的に多い(74.1%)のに対し、子どものいる女性たちでは、子どもが生まれたら家庭に入った方がよいという意見の支持者が過半数(52.2%)を超えている。独身女性はその中間と言うことになるが、既婚女性でひとりもいない「結婚退職」を支持する人がわずかながらもいる(5.6%)のは興味深い。それぞれ、現在の生活を鑑みてこうした回答傾向が出てきたのだろう。既婚無子女性の多くは「結婚しても仕事は十分続けられる」と自信を持ち、既婚有子女性は「育児と仕事の両立は現在のシステムの中ではかなり困難である」と判断している。独身女性で「結婚退職」を支持する人がいるのも、現在の仕事のしんどさ、「寿退職」へのある種のあこがれのようなものがあると考えられる。

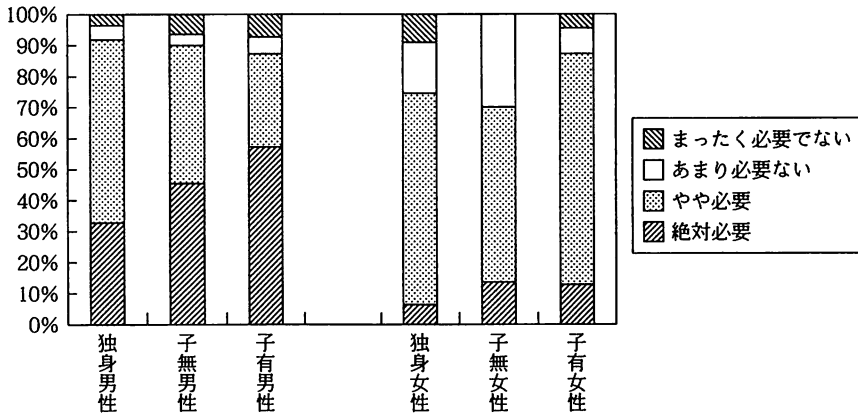
#### 4-2 男らしさ・女らしさ

性別役割ということでもうひとつ見ておきたいのが、「デート費用の負担」についての考え方である。この質問は、87年調査では尋ねていないので92年調査と比較したい。デート費用の何割を男性が負担すべきかという平均値を見てみると、92年の男子学生たちは5.90割を負担すべ

きだと考えていたのだが、今回の調査の男性たちは6.69割を負担すべきだと考えている。この傾向は女性でも同様で、92年調査では5.47割しか期待していなかったのに対し、今回調査では5.87割に上昇した。一見すると、こうした変化は平等化志向の流れと相反するようだが、男女間で経済的に差がほとんどない学生時代と、賃金格差をはじめとして、男女間に経済的な差が厳然として存在することを身に染みて知った30歳前後の人々とは、このような違いが出てくるのは当然なのだろう。ここでも、既婚有子男性は、7.17割という高い値を出しており、こうした場面でも男性役割を演じることにに対して積極的である。



第15図 「男らしさ・女らしさ」は嬉しいか



第16図 「男らしさ・女らしさ」は必要か

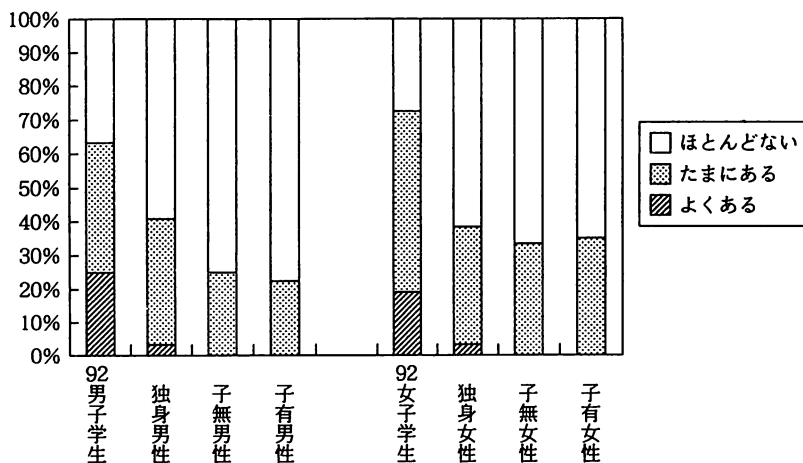
「男らしさ・女らしさ」の受け止め方についても、家庭内役割によって意識が異なる。というよりも、子どもがいるかどうかでかなり意識が異なるようだ。すなわち、既婚有子男性は、他の質問に対する回答から容易に推測されるように、もっとも性別役割分業に肯定的で、その構図の中で期待される男らしい男性役割を演じようとしているので、当然ながら「男らしいね」と言われれば素直に喜ぶ人が圧倒的に多く（72.5%）、一般的に言っても、「男らしさ」や「女らしさ」は絶対必要だと半数以上の人が思っている。また女性の方でも、独身者や子どものい

ない人に比べると、子どものいる人は「男らしさ・女らしさ」の受け止め方がより肯定的だ。「女らしいね」と言われて素直に喜ぶ人は、43.5%おり、もっとも多い。また、一般的な「男らしさ」や「女らしさ」の必要性については、絶対必要だと考える人は13%にすぎないが、どちらかと言えば必要だと考える人は73.9%もおり、両者を合わせた肯定的回答は、独身女性や子どものいない既婚女性よりはるかに高い。このように子どものいる人々がもっとも「男らしさ・女らしさ」に肯定的なのは、もともとそういう価値観の持ち主だったとも考えられるが、それとともに可能性が高いのは、子どもを育てていく中で、「男らしさ・女らしさ」といったものが、決してマイナスばかりではないことに気づかされるせいではないだろうか。伝統的な「男らしさ・女らしさ」イメージをすべて否定しながら子どもを社会化していくことは非常に困難である。そうした認識を実感として持つことによって、個人的にも、一般的にも、「男らしさ・女らしさ」に肯定的な意識が高まるのではないだろうか。

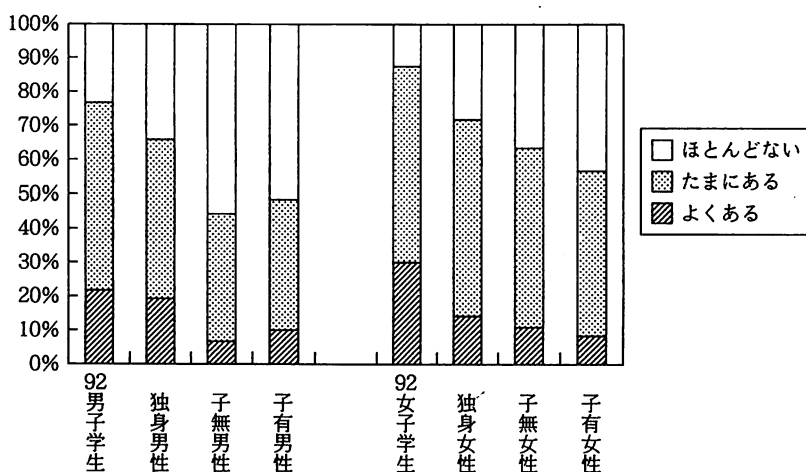
## 5 友人関係と協調性

### 5-1 友人関係

友人関係も、87年調査では尋ねていないので、92年調査の学生たちと比べてみよう。まず端的な差として注目されるのは、「群れ行動」の減少である。「よくある」と「たまにある」を合わせて、44.7%あった「友人と一緒にトイレに行く」という行動は、わずか11.4%に減り、同じく65.8%もあった「特別な目的もなく友人とぶらぶらする」という行動をとる人も、33.7%と大幅に減っている。いつでもキャンパスに来れば、時間を持って余した友人たちを容易に見つけることのできる学生たちと、時間に追われて生活している社会人とは、「群れ行動」をとり



第17図 群れ行動 (友人とぶらぶらする)

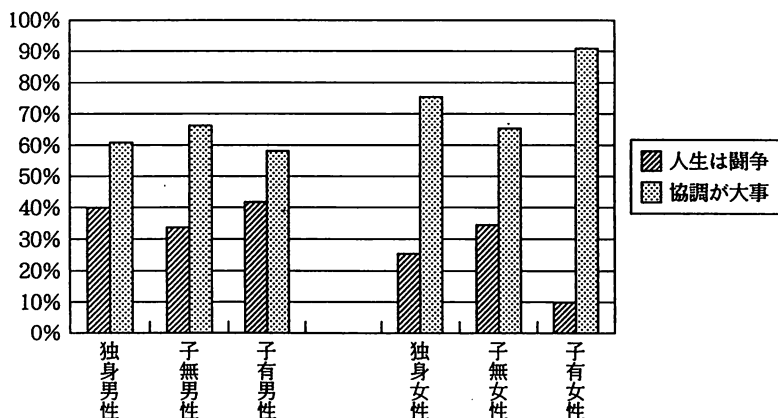


第18図 1人でいるのは寂しいと思う

うる可能性があまりにも異なるゆえ、この結果は当然と言えよう。家庭内役割別では、あまり大きな差は出ていないが、男女とも独身者が相対的に群れ行動をやや多く行っているようだ。彼らは結婚している人々に比べ、友人と過ごす時間が多少取りやすい上に、1人でさみしいという思いも強く、こうした群れ行動をとるのであろう。しかし、それでも学生と比べれば、はるかに少ない。

友人と一緒に行動する機会が減ったことにより、親友の数も減っている。伝統的なイメージから言えば、本来親友というものは心と心のつながりの深い友人のことを指すのであって、一緒に群れ行動をするかどうかなどあまり関係のないことのはずだが、さらりとした付き合いを好む「新人類」以下の世代にとって、よく一緒に行動する友人は親友に数えられることが多い。それゆえ、そうした行動がとりにくくなってくると、親友数も少なくなってくるのである。男性では、すべての層で親友数は減少し、特に子どものいる男性でその減少率は高い（92男子学生：6.66人、95既婚有子男性：4.00人）。まさに、この層は仕事と家族のために時間を使い、友人との行動などもっともとりにくい層だと言えよう。他方、そのパートナーにあたる子どものいる女性では、唯一学生よりも親友数が増えている（92女子学生：4.44人、95既婚有子女性：4.78人）。しかし、これも予想外の結果ではない。子どもを持つようになると、女性たちはその子どもを介して新たな友人関係を急速に広げてゆく。保健所で、近所の公園で、幼稚園で、同じ年齢の子を持つ母親たちは、子どもという共通の話題で容易に仲良くなっていくのである。親友の考え方や行動がまちがっていると思った時にも特に忠告はしないと答える人が6割もいるこの既婚有子の女性たちで、親友数が増えているということは、まさに彼女たちにとっての親友がどのような存在であるかをよく示していると言えよう。

5-2 協調性



第19図 人生観

友達と何かをしようとする時、みんなに合わせるか、それとも一人でも自分のしたいことをするかという選択では、やはり大多数の人がみんなに合わせると答えている(75.7%)。家庭内役割別で見ても、合わせるという人が大体3/4前後でありあまり大きな差はないが、既婚有子の女性たちは、その割合が95%を超え、高い協調性を示す。これと関連して、この層の女性たちは、人生観でも「他人と争わず、何事も丸くおさめて自然のなりゆきに従っていくのが賢いやり方だ」という意見(協調志向)を支持する者がもっとも多い(90.9%)。もうひとつの人生観である「人生は闘争だから、他人との競争に打ち勝てなければ何事もできない」という意見(闘争志向)を支持する者が相対的に多いのは、男性では既婚有子(41.7%)、女性では既婚無子の層(34.6%)であり、ともに上昇志向の比較的強い層である。

この人生観は、他の多くの項目との関連が見られる(第2表参照)。男女ともに共通しているのは、「闘争志向」の人々がもっとも多く選ぶ生活目標が「しっかりと計画をたてて豊かな生活を築く」であり(男:49.2%, 女:60.0%)、出世志向がやや高いのに対し、「協調志向」の方は、「身近な人たちとなごやかな毎日を送る」という生活目標がもっとも支持されており(男:42.3%, 女:43.5%)、出世よりも気楽な地位にいることを望んでいる点である。この人生観は、言い換えれば、自分で道を切り開いて行こうとする「自力主義」(闘争志向)と、なりゆきにまかせる「他力主義」(協調志向)とも言えるので、生活目標や出世志向との間でこのような関係が出てくるのであろう。この他に、男性では、上で取り上げた「みんなに合わせるかどうか」という質問と関連が見られる程度だが、女性の方では、ジェンダー意識に関する項目との間で強い関連が見られる。その関連の仕方は一貫しており、「闘争志向」の女性の男女平等化志向が、「協調志向」の女性たちに比べて強い。「闘争志向」の女性の半数以上が、別姓夫婦を望み、男に生まれ変わりたいと考えている。そして、結婚後も仕事をずっと続けるべきだという意見の

「新人類」は今（片桐）

第2表 人生観別意識

(単位：%)

|                         | (男 性) |      | (女 性) |      |
|-------------------------|-------|------|-------|------|
|                         | 闘争志向  | 協調志向 | 闘争志向  | 協調志向 |
| (生活目標)                  | ***   |      | ***   |      |
| 1. その日その日を自由に楽しく過ごす     | 27.1  | 20.6 | 13.3  | 23.9 |
| 2. しっかりと計画をたてて、豊かな生活を築く | 49.2  | 27.8 | 60.0  | 26.1 |
| 3. 身近な人たちと、なごやかな毎を送る    | 18.6  | 42.3 | 13.3  | 43.5 |
| 4. みんなと力を合わせて、世の中をよくする  | 5.1   | 9.3  | 13.3  | 6.5  |
| (出世するより気楽な地位にいたいか)      |       |      | ***   |      |
| 1. そう思う                 | 54.2  | 66.3 | 40.0  | 78.0 |
| 2. そうは思わない              | 45.8  | 33.7 | 60.0  | 22.0 |
| (みんなに合わせるか)             | ***   |      |       |      |
| 1. 合わせる                 | 62.3  | 82.7 | 70.0  | 80.4 |
| 2. 自分のしたいことをする          | 37.7  | 17.4 | 30.0  | 19.6 |
| (生まれ変わり希望)              |       |      | **    |      |
| 1. 男に                   | 85.0  | 82.8 | 55.2  | 30.4 |
| 2. 女に                   | 15.0  | 17.2 | 44.8  | 69.6 |
| (「男(女)らしい」と言われたら嬉しいか)   |       |      | *     |      |
| 1. はい                   | 67.2  | 64.7 | 20.0  | 42.4 |
| 2. 一概に言えない              | 26.2  | 31.3 | 66.7  | 52.2 |
| 3. いいえ                  | 6.6   | 4.0  | 13.3  | 5.4  |
| (男(女)らしさは必要か)           |       |      |       |      |
| 1. 絶対必要だ                | 52.5  | 37.4 | 3.3   | 13.0 |
| 2. どちらかといえば必要だ          | 39.3  | 52.5 | 60.0  | 68.5 |
| 3. どちらかといえば必要ではない       | 3.3   | 5.1  | 23.3  | 14.1 |
| 4. まったく必要ではない           | 4.9   | 5.1  | 13.3  | 4.4  |
| (改姓)                    | *     |      | ***   |      |
| 1. 当然、妻が名字を改めるべきだ       | 18.0  | 8.2  | 0.0   | 2.2  |
| 2. 現状では、妻が名字を改めた方がいい    | 37.7  | 36.7 | 6.9   | 36.3 |
| 3. どちらが名字を改めてもよい        | 19.7  | 36.7 | 41.4  | 38.5 |
| 4. 夫と妻は別々の名字のままでよい      | 24.6  | 18.4 | 51.7  | 23.1 |
| (女性の仕事)                 |       |      | **    |      |
| 1. 結婚したら家庭に専念した方がよい     | 11.9  | 15.5 | 0.0   | 4.4  |
| 2. 子どもができれば、家庭に専念する     | 45.8  | 46.4 | 17.2  | 40.2 |
| 3. できるだけ職業を持ち続ける        | 42.4  | 38.1 | 82.8  | 55.4 |
| (家事・育児)                 |       |      |       |      |
| 1. 妻がやった方がよい            | 8.2   | 15.6 | 0.0   | 1.1  |
| 2. 夫もできるだけ協力すべき         | 77.1  | 68.8 | 51.7  | 64.8 |
| 3. 公平に分担すべき             | 14.8  | 15.6 | 48.3  | 34.1 |

(カイ二乗検定 \*\*\*... P<0.01 \*\*... P<0.05 \*... P<0.10)

支持者は8割を超す。現状に流されず、自力で闘い自分の生活を改善して行こうと考える女性たちにとって、男女不平等なシステムは、何よりも邪魔な改革すべきものと映るのであろう。

確かに「闘争志向」の人たちにはこのように何事にも積極的な姿勢が見られるが、あくまでもこの人々が少数派にすぎないことをきちんと認識しておかなければならない。男性で37%、女性では24%しか「闘争志向」の人はいない。残りの人たちは、「何事も丸くおさめて自然のなりゆきに従う」という「協調志向」なのである。87年調査と比べると、さらに「闘争志向」が

減少し、「協調志向」が増加する傾向にある（男性：54.6%→61.9%，女性：69.2%→75.4%）ことが確認される。92年調査では、女性の方で「闘争志向」が増していたので、今回の調査で表れた結果というのは、時代効果というより、加齢による効果と見た方が良いだろう。もともと60年代までの若者世代と比べれば、「協調志向」の強かった「新人類」世代は、大学を卒業してさらに「協調志向」を強めつつあると言えよう。

## 6 ま と め

以上様々な意識や価値観を見てきたが、最後に、彼ら「新人類」世代が、大学を卒業してどのように変化したのか——あるいは、しなかったのか——、そしてそれはどのような理由によるものなのかをもう一度まとめて考えてみたい。

本稿のはじめに、彼らが変化しているとすれば、その原因としては、加齢による影響、社会的な役割の変化による影響、時代の変化による影響が考えられるだろうと指摘しておいたが、実際に様々な分析をして明らかになったことは、以下のような点である。第1に、単純な加齢による影響はわずかしは見られないこと。第2に、社会的な役割の変化による影響は、様々な点にわたって見られること。第3に、時代の変化による影響は、国際的・国内的な政治状況の変化と、ジェンダーをめぐる状況の変化に関わる意識や意見のところで、かなり明確に見られること、などである。本研究の主たる狙いは、大学卒業後4～7年を経たことによって、学生時代と異なる意識や価値観を人々が持つようになったかどうかという点にあるので、上で指摘したことのうち、特に注目すべきなのは、第1と第2の点である。そこで、これらの点について、もう少し詳しく触れてみたい。

まず、単純な加齢効果がわずかしは見られないことについてだが、当初の予想では、年齢を増すことで「大人」としての自覚がめばえ、社会関心や政治関心が高くなったり、仕事や生活目標などが変化するのではないかと考えていたが、どうやら単純な加齢だけではそうした変化はあまり起こらないようだ。20歳代後半から30歳代初めの人を対象にしたこの調査で、自分のことを「大人」だと認識している人が半数に届かなかった（47.6%）ことは、単に年齢を増しただけでは意識は変わらない端的な例かもしれない。しかし、加齢は社会的役割の変化をもたらし、そのことによって意識や価値観が変化しているのだから、間接的には大きな影響を与えていると見ることもできよう。

次に、社会的役割が変化したことによる影響についてまとめておこう。社会的役割の変化は仕事と家庭によってもたらされている。常勤の仕事を持つことによって、人々はいわゆる「社会人」となり、学生時代とは全く異なった生活スタイルを強いられる。自由な時間が大幅に減少するため、友人とのつきあい方や、テレビやマンガに対する関心に変化せざるをえなくなっている。また、経済活動の一端を担う「社会人」として、経済問題への関心を高めている。他



方、家庭の方では、結婚して親から独立した際に、また子どもを持った時に、社会的役割は大きく変化する。前節までたびたび指摘してきたことだが、やはりこの家庭内での役割の変化こそ、多くの意識や価値観の変化を導いているものである。仕事に対する意識、生活目標、生活に対する満足感、ジェンダー意識など多くの点で、この家庭内役割による違いが見られた。特に、父となり、母となった人々は、仕事志向が強くなったり、家庭や地域の問題に関心が高くなったりと、いわゆる「大人」の意識にもっとも近づいてきている。

しかし、これらの変化は学生時代の意識や価値観と比べて、質的に全く異なったものになったというほどのものではない。かつての若者世代のような批判的価値観の持ち主ではない「新人類」世代は、就職をし、家庭を持ったからといって、ドラスティックに変えなければならぬような意識や価値観ははじめからあまり持っていなかった。彼ら「新人類」世代の価値観は、もともと若者特有の価値観というよりは、豊かな時代が生み出した中流意識を持った人々に適合的な価値観である。それゆえ、「新人類」世代は、学生時代から持っていた意識や価値観を大きく変えることもなく、「社会人」となることができた。しかし、こうした若者特有の価値観が衰微したことにより、ある意味では若者は「大人」へ脱皮しにくくなったとも言えるかもしれない。すでに子の親となった人でも、まだその4割が自分のことを「大人」だと認識していない。若者的価値観と「大人」的価値観の境目があいまいになったことにより、少なからぬ若者が、就職をしても、結婚をしても、親となっても、「大人」になったという自己認識を明確に持てぬまま、年齢を重ねている。もちろん、さらに年齢を増していけば、「大人」だという自己認識を持つ者は増えていくだろうが、しばらくの間は、「新人類」世代は、「『大人』になりきれない『若者』たち」でありつづけるだろう。そして、こうした傾向が今後も続くならば、長い間自明視されてきた「若者と大人」という区分そのものが徐々に消失していくことになるのかもしれない。

[付記：本研究は、平成7年度文部省科学研究費（基礎研究(C)2）（課題番号：07610212）を受けて行ったものである。]

調査票（単純集計付）

1995年8月（実施）

郵送調査 配布数 960 回収数 288（回収率 30.0%）

| <専攻>     |          | <入学年>    |          | <卒業年>    |          |
|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 社会学専攻    | 65(22.6) | 1983年以前  | 9( 3.1)  | 1988年    | 72(25.0) |
| 産業心理学専攻  | 81(28.1) | 1984年    | 68(23.6) | 1989年    | 68(23.6) |
| マスコミ学専攻  | 96(33.3) | 1985年    | 69(24.0) | 1990年    | 61(21.2) |
| 産業社会学専攻  | 43(14.9) | 1986年    | 57(19.8) | 1991年    | 85(29.5) |
| DK, N.A. | 3( 1.0)  | 1987年    | 78(27.1) | DK, N.A. | 2( 0.7)  |
|          |          | DK, N.A. | 7( 2.4)  |          |          |

| <年齢> |          |     |          | <性別> |           |
|------|----------|-----|----------|------|-----------|
| 26歳  | 34(11.8) | 30歳 | 49(17.0) | 男    | 164(56.9) |
| 27歳  | 55(19.1) | 31歳 | 13( 4.5) | 女    | 124(43.1) |
| 28歳  | 60(20.8) | 32歳 | 6( 2.1)  |      |           |
| 29歳  | 70(24.3) | 35歳 | 1( 0.3)  |      |           |

まず、あなた自身のことについてお教え下さい。

F 1 あなたは結婚されていますか。

1. 結婚している 138 (47.9)      2. 結婚していない 150 (52.1)

F 2 お子さんはいらっしゃいますか。

1. いる 65 (22.6)                      2. いない 223 (77.4)

F 3 現在、あなたはひとりで暮していますか、それとも同居している人がいますか。同居している人がいる場合は、あなたとの続柄をお教え下さい。[アフターコード]

1. 未婚・ひとり暮らし                      40(13.9)  
 2. 未婚・親との同居                      106(36.8)  
 3. 未婚・親以外の人との同居              4( 1.4)  
 4. 既婚・配偶者のみと同居                73(25.3)  
 5. 既婚・配偶者と子どもと同居          52(18.1)  
 6. 既婚・親と配偶者と同居                1( 0.3)  
 7. 既婚・親と配偶者と子どもと同居      10( 3.5)  
 8. その他                                      1( 0.3)  
 DK, N.A.                                      1( 0.3)

F 4 あなたのお仕事は次のいずれにあたりますか。

1. 会社員                                      183(63.5)      5. パート・タイマー      14( 4.9)  
 2. 自営業・家業手伝い      19( 6.6)      6. 専業主婦                      30(10.4)  
 3. 公務員・教員                      25( 8.7)      7. 無職                              8( 2.8)  
 4. 学生・大学院生              9( 3.1)      8. その他                              0( 0.0)

F 5 あなたは大学時代、授業にはよく出席した方ですか。

1. よく出席した                      44(15.3)      2. まあまあ出席した              122(42.4)

「新人類」は今（片桐）

3. あまり出席しなかった 80(27.8)      4. ほとんど出席しなかった 42(14.6)

Q 1 あなたは、自分のおとうさんを尊敬していますか。

1. 非常に尊敬している。 87(30.2)  
 2. どちらかといえば尊敬している。 147(51.0)  
 3. どちらかといえば尊敬していない。 39(13.5)  
 4. まったく尊敬していない。 11( 3.8)  
 DK, NA. 4( 1.4)

Q 2 では、おかあさんを尊敬していますか。

1. 非常に尊敬している。 103(35.8)  
 2. どちらかといえば尊敬している。 156(54.2)  
 3. どちらかといえば尊敬していない。 21( 7.3)  
 4. まったく尊敬していない。 6( 2.1)  
 DK, NA. 2( 0.7)

Q 3 友人関係についてお伺いします。あなたには、現在、親友と呼べる友達が何人ぐらいいますか。

0人 8( 2.8)    1人 20( 6.9)    2人 50(17.4)    3人 66(22.9)    4人 30(10.4)  
 5人 50(17.4)    6人 8( 2.8)    7人 9( 3.1)    8人 9( 3.1)    9人 1( 0.3)  
 10人 21( 7.3)    11人以上 11( 3.8)    DK, NA. 5( 1.7)    [平均値 4.60人]

Q 4 もしも親友の考え方や行動がまちがっていると思った時、あなたはどうしますか。

1. まちがっていると指摘する。 189(65.6)  
 2. 人それぞれ考え方は違うから、別に何も言わない。 96(33.3)  
 DK, NA. 3( 1.0)

Q 5 友達と何かをしようという時に、あなただけしたいことが異なっていた場合、どうしますか。

1. みんなに合わせる。 218(75.7)  
 2. 一人でも自分のしたいことをする。 68(23.6)  
 DK, NA. 2( 0.7)

Q 6 あなたは、以下にあげるようなことがどの程度ありますか。

|                        |          |           |           |        |
|------------------------|----------|-----------|-----------|--------|
|                        |          | よくある      | たまにある     | ほとんどない |
| a. 一人であるのが寂しいと思うことがある。 | 37(12.8) | 136(47.2) | 115(39.9) |        |
| b. 友人と一緒にトイレに行く。       | 3( 1.0)  | 30(10.4)  | 255(88.5) |        |
| c. 特別な目的もなく友人とぶらぶらする。  | 6( 2.1)  | 91(31.6)  | 191(66.3) |        |

Q 7 次に、男性観・女性観をお伺いします。まず、もしも、もう一度生まれ変われるとしたら、あなたは、男と女のどちらに生まれてきたいですか。

1. 男 182(63.2)    2. 女 103(35.8)    DK, NA. 3( 1.0)

Q 8 デートの際の費用は、男女間でどのように負担すべきだと思いますか。

男 5割 : 女 5割 107(37.2)  
 男 6割 : 女 4割 67(23.3)  
 男 7割 : 女 3割 59(20.5)  
 男 8割 : 女 2割 23( 8.0)  
 男 9割 : 女 1割 9( 3.1)  
 男 10割 : 女 0割 17( 5.9) [平均値] 男 6.33割 : 女 3.67割  
 DK, NA. 6( 2.1)

- Q9 あなたは、「男らしいね」と言われたら、嬉しいですか。[男性の方へ]  
 あなたは、「女らしいね」と言われたら、嬉しいですか。[女性の方へ]
1. はい 152(52.8) 2. いいえ 18( 6.3) 3. 一概に言えない 118(41.0)
- Q10 「男らしさ」や「女らしさ」は必要だと思いますか。
1. 絶対必要である 83(28.8) 2. どちらかといえば必要である 159(55.2)  
 3. どちらかといえば必要ではない 29(10.1) 4. まったく必要ではない 17( 5.9)
- Q11 一般に結婚した男女は、名字をどのようにしたらよいとお考えですか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。
1. 当然、妻が名字を改めて、夫の方の名字を名のるべきだ。 22( 7.6)  
 2. 現状では、妻が名字を改めて、夫の方の名字を名のった方がよい。 95(33.0)  
 3. 夫婦は同じ名字を名のるべきだが、どちらが名字を改めてもよい。 96(33.3)  
 4. わざわざ一方に合わせる必要はなく、夫と妻は別々の名字のままでよい。 71(24.7)  
 DK, NA. 4( 1.4)
- Q12 結婚した女性が職業を持ち続けることについて、どうお考えですか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。
1. 結婚したら、家庭を守ることに専念した方がよい。 26( 9.0)  
 2. 結婚しても子どもができるまでは、職業を持っていた方がよい。 116(40.3)  
 3. 結婚して子どもが生まれても、できるだけ職業を持ち続けた方がよい。 139(48.3)  
 DK, NA. 7( 2.4)
- Q13 家事や育児を夫婦はどのように分担すべきだと思いますか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。
1. 本来女性の方が向いているので、妻がやった方がよい。 21( 7.3)  
 2. どちらかといえば、女性の方が向いているとは思いますが、夫もできるだけ協力すべきだ。 189(65.6)  
 3. どちらの方が向いているかなどとは言えないので、公平に分担すべきだ。 70(24.3)  
 DK, NA. 8( 2.8)
- Q14 結婚していない若い人たちの男女関係について、どのようにお考えですか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。
1. 結婚式がすむまでは、性的まじわりをすべきではない。 11( 3.8)  
 2. 結婚の約束をした間柄なら、性的まじわりがあってもよい。 16( 5.6)  
 3. 深く愛し合っている男女なら、性的まじわりがあってもよい。 195(67.7)  
 4. 性的まじわりをもつのに、結婚とか愛とかは関係ない。 64(22.2)

DK, NA.

2( 0.7)

以下、さまざまな意見や考え方について伺わせていただきます。

Q15 あなたは現在の生活にどの程度満足していますか。

- |                    |           |
|--------------------|-----------|
| 1. かなり満足している。      | 67(23.3)  |
| 2. どちらかといえば満足している。 | 147(51.0) |
| 3. どちらかといえば不満だ。    | 58(20.1)  |
| 4. かなり不満だ。         | 16( 5.6)  |

Q16 ここに二つの人生観があります。しいていえば、あなたの考えはどちらに近いですか。

- |                                                |           |
|------------------------------------------------|-----------|
| 1. 人生は要するに闘争だ。他人との競争に打ち勝ていかなければ何事もできない。        | 91(31.6)  |
| 2. 他人と争うのはよくない。何事も丸くおさめて自然のなりゆきに従っていくのが賢いやり方だ。 | 191(66.3) |

DK, NA.

6( 2.1)

Q17 人によって生活の目標もいろいろですが、以下のように分けると、あなたの生活目標にいちばん近いのはどれですか。

- |                          |           |
|--------------------------|-----------|
| 1. その日その日を、自由に楽しく過ごす。    | 63(21.9)  |
| 2. しっかりと計画をたてて、豊かな生活を築く。 | 101(35.1) |
| 3. 身近な人たちと、なごやかな毎を送る。    | 97(33.7)  |
| 4. みんなと力を合わせて、世の中をよくする。  | 22( 7.6)  |

DK, NA.

5( 1.7)

Q18 以下にあげるようなことについて、あなたはどのように思いますか。

- |                                        | そう思う      | そうは思わない   | DK, NA. |
|----------------------------------------|-----------|-----------|---------|
| a. 将来のために、若い頃の苦勞は買ってでもした方がいい。          | 175(60.8) | 112(38.9) | 1( 0.3) |
| b. もう自分はおとなだと思ふ。                       | 137(47.6) | 148(51.4) | 3( 1.0) |
| c. 自分は、今の社会になんらかの影響を与えている。             | 85(29.5)  | 201(69.8) | 2( 0.7) |
| d. ある程度の収入さえ得られるなら、出世するより気楽な地位にいる方がいい。 | 185(64.2) | 99(34.4)  | 4( 1.4) |
| e. 働かないでも楽に暮していけるだけのお金があれば、遊んで暮したい。    | 131(45.5) | 156(54.2) | 1( 0.3) |

Q19 あなたは、仕事と余暇のバランスをどのようにとっていきたいとお考えですか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。

- |                                   |           |
|-----------------------------------|-----------|
| 1. 仕事よりも、余暇に生きがいを求める。             | 32(11.1)  |
| 2. 仕事はさっさとかたづけて、できるだけ余暇を楽しむようにする。 | 71(24.7)  |
| 3. 仕事にも余暇にも同じぐらい力をいれる。            | 144(50.0) |
| 4. 余暇も時には楽しむが、仕事の方に力を注ぐ。          | 33(11.5)  |
| 5. 仕事に生きがい求めて、全力を傾ける。             | 6( 2.1)   |

DK, NA.

2( 0.7)

Q20 ある会社に次のような二人の課長がいるとします。もしあなたが使われるとしたら、どちらの課長がよいですか。

1. 規則をまげてまで、無理な仕事をさせることはありませんが、仕事以外のことでは人のめんどうを見ません。 107(37.2)
  2. 時には規則をまげて、無理な仕事をさせることもありますが、仕事のこと以外でも人のめんどうをよく見ます。 177(61.5)
- DK, NA. 4(1.4)

Q21 あなたは新聞の各記事をどの程度読みますか。下記の1, 2, 3のいずれかを( )内に書き入れて下さい。[ここでは、「1. 必ず読む」を2点、「2. 時々読む」を1点、「3. ほとんど読まない」を0点として計算した得点を示す。]

- |                  |                |                  |
|------------------|----------------|------------------|
| a. 政治・外交面 (1.09) | b. 社会記事 (1.53) | c. 社説 (0.72)     |
| d. 家庭婦人欄 (0.73)  | e. 小説 (0.13)   | f. スポーツ記事 (1.19) |
| g. 投書 (0.74)     | h. 地方版 (1.14)  | i. ラジオ欄 (0.32)   |
| j. テレビ欄 (1.66)   | k. 経済面 (1.21)  | l. マンガ (0.77)    |

Q22 あなたは、次にあげるとの選挙なら投票に行こうと思いますか。行こうと思うものすべて○をして下さい。

1. 市町村長 184(63.9)
2. 市町村議会 150(52.1)
3. 都道府県知事 194(67.4)
4. 都道府県議会 134(46.5)
5. 参議院 158(54.9)
6. 衆議院 191(66.3)

Q23 あなたは、どの政党を支持していますか。

1. 自民党 24(8.3)
  2. 新進党 16(5.6)
  3. 社会党 8(2.8)
  4. 共産党 11(3.8)
  5. 新党さきがけ 3(1.0)
  6. その他 3(1.0)
  7. ない 219(76.0)
- DK, NA. 4(1.4) ↓  
(SQ23-1へ)

(Q23で「7. ない」と答えた方に)

SQ23-1 しいていえば、どの政党が支持できそうですか。

1. 自民党 22(7.6)
  2. 新進党 29(10.1)
  3. 社会党 11(3.8)
  4. 共産党 13(4.5)
  5. 新党さきがけ 16(5.6)
  6. その他 38(1.0)
  7. ない 122(42.4)
- 非該当 65(22.6) DK, NA. 7(2.4)

(以下全員に)

Q24 今の世の中は権力をもった少数の人によって動かされているという意見がありますが、あなたはどのように思いますか。

1. そう思う 134(46.5)
2. そう思わない 52(18.1)
3. 一概には言えない 102(35.4)

Q25 次にあげる社会のうちで、あなたの理想とする社会に近いのはどれですか。

1. 自由に競争ができて、能力のある人はどんどん金持ちになれるが、暮らしに困る人もできる社会。 51(17.7)
2. 国が経済を統制するので、大金持ちにはなれないが最低限の生活は確実に保証されている社会。 37(12.8)

「新人類」は今（片桐）

3. 能力のある人は金持ちになれるが、国がその人たちから高い税金をとって暮らしに困る人の面倒をみる社会。 195(67.7)  
DK, NA. 4( 1.4)

Q26 以下にあげるようなことについて、あなたはどのように思いますか。

- |                                        | そう思う      | そうは思わない   | DK, NA. |
|----------------------------------------|-----------|-----------|---------|
| a. 日本はもっと経済的に発展すべきだ。                   | 126(43.8) | 161(55.9) | 1( 0.3) |
| b. 近い将来、核兵器を使った戦争が起こる。                 | 77(26.7)  | 209(72.6) | 2( 0.7) |
| c. 現在の世界情勢から考えて、近い将来日本が戦争に巻き込まれる危険がある。 | 133(46.2) | 152(52.8) | 3( 1.0) |
| d. いずれ日本も核武装したほうがいい。                   | 14( 4.9)  | 271(94.1) | 3( 1.0) |

Q27 戦争は絶対にいけないと思いますか。あなたのお考えにもっとも近いものを以下の中からひとつだけ選んで下さい。

- |                                 |           |
|---------------------------------|-----------|
| 1. いかなる場合でも戦争はいけない。             | 180(62.5) |
| 2. 自国を他国からの侵略から守るためにはやむをえない。    | 95(33.0)  |
| 3. 他国の戦争であっても、助力の要請があれば介入してもよい。 | 6( 2.1)   |
| 4. 必要があれば、積極的に戦争という手段を利用してもよい。  | 3( 1.0)   |
| DK, NA.                         | 4( 1.4)   |

Q28 日本の自衛隊をどうすべきだと思いますか。

- |          |           |
|----------|-----------|
| 1. 増強すべき | 17( 5.9)  |
| 2. 現状維持  | 152(52.8) |
| 3. 縮小すべき | 86(29.9)  |
| 4. 無くすべき | 30(10.4)  |
| DK, NA.  | 3( 1.0)   |

Q29 自衛隊は合憲だと思いますか。

- |              |           |
|--------------|-----------|
| 1. 合憲である     | 72(25.0)  |
| 2. 違憲である     | 84(29.2)  |
| 3. どちらとも言えない | 130(45.1) |
| DK, NA.      | 2( 0.7)   |

Q30 現在様々な反核・平和運動がありますが、あなたはこうした運動に参加したいと思ったことがありますか。

- |       |          |       |           |         |         |
|-------|----------|-------|-----------|---------|---------|
| 1. ある | 68(23.6) | 2. ない | 219(76.0) | DK, NA. | 1( 0.3) |
|-------|----------|-------|-----------|---------|---------|

Q31 では徴兵制が実施されそうになった場合、あなたはその反対運動に参加しますか。

- |         |           |          |          |         |         |
|---------|-----------|----------|----------|---------|---------|
| 1. 参加する | 199(69.1) | 2. 参加しない | 86(29.9) | DK, NA. | 3( 1.0) |
|---------|-----------|----------|----------|---------|---------|

Q32 天皇制についてどう思いますか。

- |             |           |
|-------------|-----------|
| 1. 強化した方がよい | 4( 1.4)   |
| 2. 今のままがよい  | 189(65.6) |
| 3. 無くした方がよい | 92(31.9)  |
| DK, NA.     | 3( 1.0)   |

Q33 最後に、あなたにとって、いちばん大切と思うものをひとつだけあげてください。

|                     |           |
|---------------------|-----------|
| 1. 自分, 生命, 健康, 生活   | 62(21.5)  |
| 2. 家族, 友人, 恋人, 人間関係 | 119(41.3) |
| 3. 愛情, 優しさ, 精神, 心   | 23( 8.0)  |
| 4. 信念, 能力, 努力       | 12( 4.2)  |
| 5. 生きがい, やりがい, 夢    | 11( 3.8)  |
| 6. 平和, 真実, 平等       | 10( 3.5)  |
| 7. 自然, 環境           | 3( 1.0)   |
| 8. 時間, 自由           | 14( 4.9)  |
| 9. 金, 財産            | 2( 0.7)   |
| 10. その他             | 12( 4.2)  |
| DK, NA.             | 20( 6.9)  |

— 1996.7.22受稿 —